

「あなたがたを造り上げるために」

2023年2月19日

コリントの信徒への手紙一14：26～40

佐々木 佐余子

先週は異言と預言について学びを与えられたのでした。コリントの教会は主日礼拝の中で不適切な異言が語られ、クリスチャンたちは動揺していたのです。パウロが伝道旅行をしていた頃、立ち上がったばかりのキリストの群れはどのような礼拝をしていたのでしょうか。原始教会の頃です。使徒言行録を読むと、「ペトロとヨハネが、午後3時の祈りの時に神殿に上って行った」(使徒言 3:1) とあるので、その頃はまだ明確にユダヤ教と線引きがされておらず、パウロもユダヤ教の会堂を足掛かりにして説教していたのでした。パウロがコリントで伝道していた時、神を崇めるティティオ・ユストという人の家に行ったのですが、ユストの家はユダヤ教の会堂の隣にあったのです。その会堂長のクリスポは、一家をあげて主を信じる人になりました。また、コリントの多くの人々も、パウロの言葉を聞いて信じ、洗礼を受けた(使徒言 18:7~8) のです。そのような人たちが中核になって、コリントの集会が起こされたのでした。礼拝の司会者も立てられ「賛美」と「教え」「啓示」「異言」「解き明かし」「祈り」「祝福と感謝」「アーメン」と唱和する決まりもありました。聖書朗読もあり、勿論、パウロの執筆した手紙、その頃書かれていた「テサロニケの信徒への手紙」や「フィリピの信徒への手紙」「ガラテヤの信徒への手紙」も回覧され読まれていたでしょう。パウロは26節で言います、「すべてはあなたがたを造り上げるためにすべきです。」パウロは問題を多く抱えているコリントのクリスチャンを見捨てることなく本当に彼らを愛していたのです。

わたしたちは、毎週ここに集められ、礼拝を献げていますが、それによってわたしたちが主イエス・キリストに近づくよう造り上げられるためなのです。なぜ、わたしたちは世間の人々が休んでいる休日にわざわざ身支度を整え集まるのでしょうか。それは、わたしたちが主であって造り上げられるためなのです。元々安息日は、神が第7日目にご創造の業を完成されたので神が休まれた日なのです。でも、カレンダーを見ると、最初に日曜日があって休みの日になっているのは、ご存じのように主イエスが日曜日に復活されたからなのです。それでヨーロッパで中世の頃、ローマのキリスト教徒は週の初めに休むようになり、世界に広まって日本もそうなっているのです。これは恩恵です。もし、日曜日がなければ、どうでしょう。身も心もくたくたになって疲れ果てます。日曜日、御言葉に学ぶときは恵みの時であり、長い間そのような生活をする事によって人が造り上げられるのです。前の教会である先生が言われました。「僕は教会に行っていなかったらどんな人間になっていたかわからない」同感です。わたしも教会に行っていなかったらどんな人になっていたかわかりません。きっと嫌な人間になっていたかもしれません。そう考えると教会生活は大変な事もあるけれども、それ以上に恵みなのだと思います。それがはっきり分かるのはいわゆる心身に弱さがある方々に対しての見方です。教会に行っていなければそのような方々に関心も持たず、ただ

素通りだったと思います。そのような人たちを偏り見ていたかもしれません。聖書を読んで一番感動したのは、イエスさまのあたたかさです。生まれつきの盲人がいました。前にも話したことがあるのですが、「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか、本人ですか、それとも両親ですか。」「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。」そう言われて癒されたのでした。(ヨハネ福音書9:1~3) ここを読んで全く驚きました。このように考え治療した人が今までこの世にいたでしょうか。ですから、このイエス・キリストというお方は普通の人ではないのです。眼から鱗でした。イエスさまのお言葉によって自分が造り変えられていくと感じています。この七里教会は周りの先生から言われているのですが、わたしの就任式の時カードをいただき、それにはこのように書かれていました「七里教会は弱さを持つ人々と共に歩み教会を形成してゆかれる教会なので、これからも佐々木先生を中心として新しいビジョンのもとにお進みください、いつも遠くよりお祈りしております」と書かれていました。それを読んで違和感はなかったのです。平気でした。前からそのような教会だと知っていたので。人間いつかは心身共に弱くなっていくのです。早いか遅いかだけの違いだけで。聖書を読んでいくと、少しずつ自己変革が起こります。

さて、コリントの教会に戻ります。27節から33節は一つの段落です。ここを読むと大分混乱している様子がわかります。パウロがよそに伝道に赴いている間このような事態になっていたのです。一人が預言していると、まだ終わらないのに別の人が話しています。そこでパウロは人数制限をします。2人か3人にしています。全員が異言を語ることを望みません。そして、順番に話さないと言います。一緒に話すと言っているのかわからず、やかましいドラになるのです。28節に「解釈する者がいなければ、教会では黙っていて、自分自身と神に対して語りなさい」と言っています。聞いていても誰もわからない異言は、聖霊の賜物ではないので教会では黙っていなさい、人は真面目に受け取ってはなりませんと教えました。29節にあるように預言の場合も同様です。人数制限をしています。集会があまり長くならないようにするため、そして集会が賜物を競い合わないよう、教理を教えることを大事にしているからです。そして30節「座っている他の人に啓示が与えられたら、先に語りだしていた者は黙りなさい」と言います。ある人が啓示を受けて立ち上がったとしても、先の人が、自分も靈感によって語らせられているのだ、と思うことはいけない行動だと言います。抑制のきかないような靈感は本物ではないのだと教えているのです。コリントの教会は、霊の賜物によってどんなに騒乱におちいていたかを33節で語っています。「神は無秩序の神ではなく、平和の神だからです」とあるように神の教会であるコリントの教会は無秩序の礼拝になっていたのです。けれど、この時代から信徒でも預言をしていたことがわかります。預言とは神さまの言葉を語ることを説教することです。信徒も靈感によって神さまの証をしたい人が多くいたということです。それは素晴らしいことです。「わたしは神さまによってこんなに造り変えられました」と証しできればどんなに喜びであり、周りの人たちを導くでしょうか。コリントの教会は別の見方をすれば、異言も含めて多くの信徒が異言や預

言を我も我もと話したかったのかもしれませんが。パウロが手を焼くほど活発な教会だったのです。そして、最後に婦人たちに忠告しています。34節「婦人たちは、教会では黙っていなさい」と教えました。正直ショックです。パウロほどの人がそのようなことを言うなんて驚きです。パウロは女性嫌いなのでしょうか、と勘繰ります。悲しいですね。元々、婦人が預言することはユダヤ教では許されていたのです。本当に聖霊を受けたのであれば男性も女性も預言していたのです。旧約聖書を読むと、出エジプトをしたモーゼのお姉さん、女預言者のミリアムは歌やタンバリンで神さまのお話を伝えました。また、女預言者デボラは士師の時代イスラエルを裁きイスラエルの人々は彼女に裁きを求めて、神の話を聞きました。そしてフルダという女性も神のご意志を語りました。新約聖書にも数は少ないですが、女預言者はいたのです。ベトサイダ出身のフィリポの娘4人は神さまのお話をする姉妹でした。このようにイスラエルでは昔から女性に預言する霊が与えられていたのです。女性が数に入らなかった時代にも神は、女性に語ることを示されたのです。ペトロは預言者ヨエルを通して説教しました。「神は言われる。終わりの時に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたたちの息子と娘は預言し、若者は幻を見、老人は夢を見る」(使徒言2:17)と。そのように、旧約の時代から女性も預言していたのです。

2月に日本キリスト教団全国教会婦人会連合の婦人教職問題研究委員会主催の第49回婦人教職のつどいでテーマ「私たちの今を話そう」という会がありました。その中で発題があり、牧師のキリスト岡崎さゆ里先生が講演をされていました。かいつまんでお話しすると、アメリカでは1810年に「アメリカン・ボード」と呼ばれる最初の世界宣教局が成立し、当時教会に大覚醒運動・リバイバル運動が起こったそうです。イエス・キリストの大宣教命令「すべての民を私の弟子にきなさい」に応じて会衆派、長老派、改革派が教派を超えて協力し設立したのです。当時、女性は一般社会同様、教会でも重んじられなかったということです。教会員の三分の二が女性であるにもかかわらず、女性の牧師按手は認められず、役員や教会学校の教師は男性が受け持っていたということでした。それが19世紀の現実でした。先進国のアメリカでこうですからね。ところが次第に開けて行って女性に目が向けられるようになりました。1972年に女性でも執事、長老に任職されることが認められました。そして、1979年に総会で女性が按手を受けられることが認められたのです。ですからアメリカでは割合最近の事なのですね。日本ではもっと前に認められていると思います。日本では1933年に既に高橋久野という先生が按手礼を受けて牧師に任職されています。キリスト教の歴史が浅い日本でなぜ早く認められたかということ、理由は様々ありますが、宣教師が「日本の伝道は日本人の手で、そして女性への伝道は女性の手で」という考えが始めにあり、それがアメリカで叶わなかった女性教職の誕生に貢献したのではないのかと言われています。アメリカでは遅かったけれど、日本でこそ女性牧師の働きが出来るように願ったというのです。私は女性とか男性とか意識したことはあるけれども、男性は男性の働きがあり、女性は女性としての異なった働きもあるのだと思います。ある女性牧師が言われていました。「本当に女性で良かった。女性信徒が入院した時女性牧師なら何の違和感もなくすっ

と病室に入って行ける。男性牧師はこうはいかない」と言われていました。それは言えますね。そのようなデリケートなところは大事だと思います。女性牧師ならたとえ男性が病室で横になっていても平気ですからね。相手も平気で笑顔で話しかけてくれますよ。そのような性差はあるのです。

パウロの語った真意はどこにあるのでしょうか。パウロは伝道するに大変女性から支えられました。皆さん方も気付かれていますと思いますが、女性の支えなくして伝道はあまり進まないのです。天幕作りのプリスキラとアキラの夫婦はパウロを助けました。一時同じ家に住んで同業者同士伝道の話が咲いたでしょう。奥さんのプリスキラは接待してパウロの健康と体力に力をつけたでしょう。紫布の商人リディアは裕福であったので家に招いてもてなしたでしょう。キレネ人シモンの奥さんからもパウロは「大変お世話になった」とローマ書で記しています（ローマ 16:13）。このように女性から多くの支持を受けているパウロが果たして、「女性は教会で黙っていなさい」ときつい言葉で言うのでしょうか。本当に聖霊を受けたのであれば、男でも女でも区別なく預言を語ることは、旧約時代からユダヤ人にとって知られていたのです。けれどもコリントの教会の混乱は、本当の霊に紛れて狂気のような興奮状態で話をする人がおり、偽物の霊で偽って話し、自分の気持ちだけで、目立ちたいとか、いかにも信仰があるふりをして話す人が出たのです。そのような婦人が語ったのではないか。パウロがこのような状況を見て、この手紙で教えています。恐ろしいことですが、コリントの教会にあって信仰と偽善とは紙一重だったのです。37節「自分は預言する者であるとか、霊の人であると思っている者がいれば、わたしがここに書いてきたことは主の命令であると認めなさい」と語っています。

「あなたがたを造り上げるために」神は使徒パウロによってクリスチャンたちに示されています。40節「しかし、すべてを適切に、秩序正しく行いなさい」と。すべてとは共同礼拝のすべてという意味です。この後、礼拝の混乱さは手紙に書かれていないのでパウロの指導が効果をあげたものと思われまます。

